
魔法少女リリカルなのは～蒼き閃光と呼ばれた男～

伊佐未勇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは蒼き閃光と呼ばれた男

【Nコード】

N3797P

【作者名】

伊佐未勇

【あらすじ】

この物語は、片山 暁がリリカルなのはの世界に転生される話です。

もうデバイスとか、キャラ設定などが崩壊してしまうカオスが起これる物語です。

一体、主人公は新たな世界で何を掴むのか、ご期待ください。

片山 暁（前書き）

この小説は、処女作です。

皆さんに不快な思いをさせてしまつかもしれません。
それでもよいと言つ方はどうぞ

片山 暁

俺の名前は「片山 暁^{かたやま あきら}」といいます。

俺は、いま意味不明な状況下の元にいます。

何故かと言うと、目の前で「俺」が血まみれで倒れているのです。

「あれ？あれ俺だよな？じゃあ、俺は誰？と言うより何？
倒れる俺？の周りに人だかりができている、そこにクラ
スメート達もいる。

みんなが青い顔で倒れる俺を見ている、泣いている人もい
る。

で、何故か浮いている俺。

「俺浮いてますやん！！！」

どうゆうことなんや、いや落ち着け、COOLになれ俺、
とりあえず今日の事を思い出そう

今日は、朝8時に学校へ登校、授業を受け友達と駄弁り、
帰り道でたしか子供を助けたんだ。

「思い出した！！俺子供を助けたんだ！！！」

「ようやく思い出しましたか・・・」

「あんたは！！！」

「そう私は・・・」

あの幽白を読んでいた俺が間違えるわけがない。

「あなたは、コエ○マさん！！！」

「そう私はコエ・・・ちゃうわ、私は神さんの秘書や！！！」
神様？何言ってるのこいつ、そう言おうとした時。

「あんたは、死んだんや。」

「何をえっ？？？」

頭がまた混乱した、俺が死んだ？じゃあ俺は誰だ？

ア

「話は後や、今からあんたを神さんの所へ飛ばす、じゃあ
飛ばす？へっ、ちよっ、まって、ぎやアアアアアアア

そして、今俺の前で神様が土下座している・・・
「なぜ???」

神様らしき人に問いかけた。

「私の犬のせいで書類が汚れ君が死んでしまったんだ」

ああ、俺って神様の犬に殺されたのか（笑）

「まあ、いいや」

「へっ？」

神様が間抜けな顔をしている、そんなに驚いたのだろうか？

「別に未練なんて無いしね」

「じゃあ、別の世界には興味はないか？」

別の世界？ああ世で言う「転生」ってやつか。

「無いと言っちゃあ嘘になるな」

「じゃあ、リリカルなのはの世界に行って来てくれ」

りりなのかあゝまあ文句はないだろう。

「ええよ、その代わりチートな能力をくれ」

「いいだろう、言ってみなさい」

術、
俺が要求した能力は、直死の魔眼と写輪眼そして、投影魔
術、
ペルソナ、千鳥系の忍術

それと、魔力はEXそして、デバイスとユニゾンデバイス

だ。

「わかった、では行くのだアアアアア！！！」

「へっ、いや何でそんな唐突なんだよ！！！」

そしてこの俺「片山 暁」は旅立っていった・・・

片山 暁（後書き）

暁「いや、いきなり死んじゃったよ」

作者「次回の話は・・・」

暁「無視かよ!!!」

作者「俺は怖いんだよ!!!」

暁「何が??」

作者「小説の感想だよ!!!」

暁「まあ、やっちゃったもんはしょうがねえよ」

作者「・・・・・・・・・・」

暁「ああもう、作者はこれだから俺が次回予告するぜえ」

次回は原作キャラの登場、暁のデバイスが火を吹くぜ次回も読んでくれよ!!!

作者「へたくそか!!!」

何かアドバイスがあれば、コメントをください

「よし、わかった」
あれ？どうやんのかわからねえ！！！
「とりあえず名前を呼べ」
「どっちの！？」
「空だから、陽介だな」
「OKわかった。いくぜええ「陽介」」
「「ユニゾン・イン！！！」」
「ガルダイン！！！」
何とか地面につく前に風が舞い上がり助かったようだ。
「陽介は疾風属性だったな」

す。

その数約200体！！
「「ウソッ」」
どうするんだ！！「マスター」どうさっえ？
「私の名前を呼んでください」
いきなり決めれるかよ！？
「ええい、もうなんでもいい！！」
「私の名前を呼んでください」
「お前の名は・・・」

スバルside

「どりゃあああ」
とりあえずあらかたはかたずいたかな。
「スバルまだ来る！！！」
「えっ？」

転移魔法でガジェットが次々と出現する中・・・

「これじゃ、きりがない・・・」お前の名は「まだ残っている人がいた!？」

「スバル、危ない!!!」

「間に合えっ!!!」

暁
side

「お前の名は「ラグナロク」だあアアア!!!」

「マスターを片山 暁と認証、set up」

「秘儀・疾風斬」

暁の周りに風が集まり、その風が剣に集まる。

剣を暁が振り放った時、風が吹きあがり200体のガジェットが粉碎されていく。

「ふう、しゅうりよ「スバル危ない!!!」ちっ、まだいやがったか」

「秘儀・真空斬」

スバルを狙っていたガジェットを破壊した。

「あ・ありがとうございます」

「いや、お礼なんかいいよ、君が無事ならね」

(ボンっ)

何故かスバルが気絶している。まあいいか。

そんなことしているうちにガジェット転移してきたよう、多すぎだろ。

ティアナside

なにをいちゃいちゃやってんのよ・・・

この反応まさか！！！！
「二人ともあぶない」

暁
s i d e

「へっ？」

これは、やばい！！！！

「飛竜一閃！！！！」

「大丈夫か？」

そこに現れた人とは・・・

次回を待て・・・

蒼き閃光く大地に立つく（後書き）

作者「来たー」

暁「何がだよ？」

作者「飛竜一閃だぜ、そりゃ勿論・・・s」

暁「これ以上は作者の口がすべるんで次回を待て」

駄作ですみません

「こころでキャラ設定をひとつ（前書き）」

今回は、キャラ紹介です。

「片山 暁とそのデバイスたち」

このテーマで紹介していきたいと思います。

ここからキャラ設定をひとつ

名前・・・片山 暁 【かたやま あきら】

年齢・・・16歳

体重・・・52キロ

身長・・・175cm

デバイス・・・ラグナロク 【剣】

特徴

生前は、関西と関東を引越して行き来していたので、

話し方が

若干変、基本馬鹿だが眼鏡が外れると・・・
因みに容姿は、ガンダムWのヒイロ・ユイ

技

秘儀・疾風斬 【ひぎ・しつぷうざん】

この技は、ユニゾンデバイス【以下Uデバイス】の陽介とユニゾン

している場合のみ使用可能、陽介の疾風魔法を暁のラグナロクに

集めてラグナロクの斬撃と共に周囲に解き放つ秘儀。

秘儀・真空斬 【ひぎ・しんくうざん】

この技は、Uデバイスの陽介とユニゾンしている場合のみ使用可能

陽介の疾風を体全身に纏い突撃し、居合い切りにする

秘儀。

名前・・・花村 陽介 【はなむら ようすけ】
年齢・・・不明
体重・・・不明
身長・・・30cmぐらい
属性・・・風

名前・・・日向 ひでき 【ひなた ひでき】
年齢・・・不明
体重・・・不明
身長・・・25cmぐらい
属性・・・雷

ここでキャラ設定をひとつ（後書き）

以上で、主人公紹介を終了します。

次回から、六課に入局か・・・

管理局への誘い（前書き）

今回は、ついに管理局へ

主人公が

行き着く場所とは・・・

本編をどうぞ

管理局への誘い

いきなり、俺の目の前にいたガジェットの群れは姿を消した。

「大丈夫か？」

そう問われた時、俺はとっさに言葉を発することができなかった。

何故かって？

いきなり目の前にガジェットの群れだよ？びびらない？
少なくとも俺はびびった、とにかく俺はびびりなんだ。
まあ、それだけじゃなく彼女に見とれてしまったのだ。
そう、彼女「シグナム」に・・・

「おい、大丈夫なのか？」

とっさに声をかけられて多少びっくりしたが、今度は答えられた。

「えっ、ええ大丈夫です・・・」

答えたのはいいものの彼女の顔を直視できず・・・
だつてさ、きれいじゃん、凛々しいじゃん、俺ファンだし。

「そうか、ランスターは無事か？」

ああ、ティアナがいたな・・・
そう思ってるうちに、俺の腕の中で眠るスバルが眼を覚ました。

「うん、ここは・・・？」

「おっ、起きたか。おはよーさん」
スバルはポケッとした様子から一変、みるみるうちに顔が赤く

なっぺいった。

「大丈夫です、下ろしてください!!!」

どうしたんだ、俺なんか悪いことしたのかなど考えていると、

これまで黙っていたティアナが俺の顔をのぞきこんできた

「貴方を時空管理局に連行します!」

ああ、貴方は次元漂流者ですねてきなと言われると思っただけだ

そういう雰囲気ではなさそうだ。

「まあ、待てティアナ」

シグナムがそう言った。

「ですが!」

とティアナも食い下がるが命令には逆らえず折れてしまった。

「すまん、我々と共に来てもらえるか?」

シグナムの問いかけに俺は何の迷いもせずこう答えた。

「いいですよ」と・・・

しかし、この選択が俺の命運を左右することをまだ俺は知らなかった・・・

〜六課〜

「主、はやて次元漂流者をつれてまいりました」

シグナムが律儀にそういうと中から

「入ってきてええよ」

と聞き覚えのある声が返ってきた。

そしてそこに現れたのは、六課のトップ「八神 はや

て」であった・・・

「君か、次元漂流者と言う人は」

何かを探るように聞いてくるはやて、さてどう答えた

ものか・・・

「そうだよ」

俺の肩の上にいた陽介が答えていた。

「ほう、君は？」

そう尋ねられた陽介は、

「俺は、こいつのUデバイスの陽介だ、こっちの青いのは日向だ。」

「蒼いのってなんだよ!!!」

などと日向が講義しているがそつとしておこつ。

「そうか、Uデバイスね、で君は？」

そう問いかけられ

「俺の名前は、片山 暁です。見ての通り迷子です。」

そう答えると、はやては暁ねえと唸っていた。

何か、まずかったのだろうか？

「えつと・・・」

気まずそうにしているとシグナムが

「主、まずは説明を」

「えつ、ああそうやったな暁君ごめんな」

ここからは、管理局について、次元漂流者について説

明をつけた。

そこから定番の台詞が登場

「暁君は管理局に入局せえへんか？」

ときたので、

「協力であればいいですけど、入局は・・・」

「いや、それだけでも十分やわ」

ここまでは、よかったのです。

そう、問題はここからなのです。

「次に暁君に住んでもらうとこやけど・・・」

そついうと、シグナムが

「主、主の家に迎え入れたらどうでしょう？」

「だ？」

と、俺が期待していた展開にもっていつてくれた。

「うん、そうやなそうしよう、暁君はそれでええか」

と問いかけてきたので俺は、はいと言ってしまったの

「暁君は16歳やんな、じゃあ学校にいかなあかな」

この、一言がカオスへの入り口だったのです・・・

管理局への誘い（後書き）

「モンハンがほしい!!!!!!!!!!!!!!」

暁「何だよ突然？」

「みんなやってから、俺もほしいんだよ!!」

暁「小説の練習をしろ、それから勉強」

「なんだよ、何時になく毒舌だね暁君？」

暁「知ってんだぞ、数学のテストの点数」

「うつ、ふん、赤点じゃないもんね」

暁「3「うおおお」でもか？」

「勉強します」

次回を待て・・・

転校先は夢の楽園（前書き）

！

さあ、学校にLet、go!!！

転校先は夢の楽園

「暁の夢の中」

「うっ、ここは？」

俺は、よくわからない霧の中にいた。

目を凝らして霧の中の「――」を見ようとすると何かが邪魔をして

見ることはできない。

I am the born of my sword

そういうと、手には身に覚えがない剣が

二刀あった。

これで、戦えと言つことなのだろうか？

でも、誰と？

「人の可能性を見せてやる、いくぞ「――」！」

「――」

そういつて、その「――」に突っ込んでいった。

そうすると、相手が俺の頭を掴んでこう言った。

「君が「・・・」を知るにはまだはい」

そういつて、俺の目の前から消えた・・・

く八神家く

「おい、起きろ」

うるさいな、もう少し寝かせる

「おいったら」

zzzz

「起きやがれ！！！！りや！！！！」

「ぐふうふうふうふうふう」

あまりの激痛で目を覚ました。

そこには、小学生くらいの女の子がいた・・・

「なんや、なんや？」

下のリビングにまで聞こえたのか、はやてがやってきた。

「ヴィー　　つつ　　こさな　あかんやろ」

「だって こい おきな から」

痛みでうまいこと聞き取れないが、

「暁君、朝ごはんやで」

という言葉は聞こえたのでリビングに下りていった・

・

で、

急いで席に着いた。

朝食中は他愛のない会話が飛び交っていた。

登校の時間になったので、席を立つとはやてが玄関

まで

ついてきてくれた。

はやてが笑顔で

「いつてらっしゃい」と言ってくれたので。俺も

「いつてきます」と思わず笑顔で返してしまった。

くただいま登校中」

学校につき職員室に行くと先生が近寄ってきた。

「えっと、片山 暁くん？」

「はい、そうです」

「そうか、今日から君の担任になる「林 慶彦」だ。」

眉毛が太い先生だなあ〜と思いつつ

「よろしく、お願いします」

と、頭を下げた

「君のクラスは2 - E 組みだ。」

と、朝のSHRが始まった。

林先生が転校生の話題に持っていき

「片山く、入って来い」

と言われたので扉を開けて中に入った

「今日から、転校して来た片山 暁です。皆さんに」

おかけするかもしれませんが、よろしくお願いします。

迷惑

「

「よし、暁そこの空いている席に座れ」

なぜ、下の名前で呼んだのか分からんが・・・

言われた、席に向かった。

席に着くと、隣の生徒に声をかけられた。

「片山君、今日からよろしく。」

「ああ、よろしく」

「僕の名前は、「直枝 理樹」」

「うん、そうk うえ、何故!？」

「あと君の隣にいるのは「碓氷 拓海」君だよ」

「よろしくー」

何がどうなってんだ？

転校先は夢の楽園（後書き）

暁「おいおいおい、何だこの展開は!？」

作者「時代は、クロスオーバーにあるんだよ」

暁「いやいやいや、混ぜすぎだよ」

作者「好きなもん、混ぜたらこうなったんだ」

暁「どう、つなげていくんだよ!!!」

作者「おおまかにまとめて、みんな魔道士になる」

暁「ええ」

作者「今日はここまでだ」

暁「次回は、風紀委員長と生徒会長との出会い」

作者「それだけじゃないかな」

次回を待て

戦いの予兆（前書き）

ついに、会長たちと合流！！！！

戦いの予兆

「数学の授業中」

何で、理樹と碓氷がいるんだ？

ここは、「りりなの」の世界じゃなかったのか？

「こおくら、きいてんのか片山」

「・・・えっ、聞いてましたよ。」

「ならこの問題を解いてみる。」

やべえ、ただでさえ数学は苦手なのに・・・

（おい、暁）

おっ、なんだなんだ頭の中に声が響いてくる。

（聞ってるか？）

（おう、念話のことを忘れていただけだ。）

陽介は、呆れている・・・

（今日、午後8時に公園に来い・・・）

（何かするの？）

(後で言う・・・じゃあな)

(まで。)

(なんだよ、俺忙しいの)

(この問題わかるか?)

(106°だよ)

「片山、まだか?」

先生が何かを期待しているが、

「106°です。」

先生は、少し間を置いてから

「正解だ、ちっ」

あいつ舌打ちしやがった、俺が悪いの、いや悪くない

でも、なんか腹立つな

おっ、消しゴムが落ちている

どうする俺、どうするよ

投げる、放る、当てる

よし、あえてあいつをつぶすか・・・

こう見えても、俺は甲子園優勝投手なんだよ〜ん

(くられ、ジャイロレイサー!!!)

「ぎゃあ」

当たった本人は、俺をがんみ

俺、知らないふりを続けている

しかし、とある生徒「モアイ」により内部告発

「片山!!!後で地獄の間に来い!!!」

「へ〜い」

後で、モアイ殺す!!!!!!!

〜鬼の間?〜

ああ〜だりい

そんなことを反省文を書きながら考えていた俺の元に

「すまない、またせてしまったか？」

生徒会長が

「確か、片山 暁だったな？」

「はい、間違いありません。」

しかし、どつかで聞いたことのある声だな

「私は・・・」

何処だったかな？

「生徒会長の・・・」

確か家で・・・

「鮎沢 美咲だ」

ああ、「みさちゃん」だあゝつてえええ！！！！

俺が驚愕していると・・・

「すぐに、風紀委員長が来るからな」

風紀委員長？あの人しか頭に思い浮かばない！！！！

やばい、俺あの人の責めを凌ぎきる自信ねえ！！！！

「遅くなりました」

入ってきたのは、ピンク色の長い髪の綺麗な少女
きやがったあああああああ

「二木 佳奈多」であつた。

〔尋問中〕

「すみませんでした。」

「本当に分かっているのか？」

ああ、くそ何回目だよこのやり取り……

いい加減むかついてきたぜ

「暁は、悪くないよ会長」

「げっ、この声は」

会長が何故か身構えている、何か戦いが始まるのだ

ろっつか？

「そうだよ、佳奈多さん」

「直枝っ？」

二木さんは、驚いている。

「なぜ、貴方がここに？」

みで

二木さんが理樹に問いかけると、理樹は、満面の笑

多さんに

「リトルバスターズのみんなが退院したから、佳奈

報告しようかなあゝて」

えっ、と驚いたままの二木さん

身構える会長

呆然とする俺

言葉を発したのは碓氷だった。

「なんか、先生が晝に喧嘩を売ったみたいだよ」

会長は、疑惑の目をしながら俺に

「今の話は本当か？」

と聞いてきたので、俺は

「まあ、ほとんど本当ですね」

すまなかったと会長は落ち込んでいる

それを確氷が慰めていた？

まあ、こっちはすんだ次はあっちだ。

「お姉ちゃん！！！」

いきなり女の子が二木さんに抱きついた。

「葉瑠佳！！！」

感動の対面をはたしていた・・・

さて、そろそろお暇しますか・・・

俺が出て行こうとすると、理樹に引き止められ

「暁、紹介したい人たちがいるんだ」

俺の予想が当たっていれば、リトバスの面々だろう

・・・いくしかないか・・・

「いいよ」

「本当、じゃあ来て」

「恭介連れてきたよ、かれが・・・」

「味噌汁の中で一番好きな具は？」

いきなり、テストがきやがった

「ねぎ」

「合格」

「お前の名は？」

「片山 暁だ。」

俺は、恭介たちと別れ家に帰っていった。

そして……

~~~~~午後8時~~~~~

漆黒の鎧をきた人物がいた。

「よし、いくか陽介……!!」

## 戦いの予兆（後書き）

作者「無理・・・」

暁「混ぜすぎなんだよ」

作者「ごめんね」

次回

新たな魔道士覚醒

次回を待て

ここで、アンケート

恭介たちは、誰と恋愛すればいいか協力を  
男性陣

恭介

真人

謙吾

幸村

など・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3797p/>

---

魔法少女リリカルなのは～蒼き閃光と呼ばれた男～

2010年12月14日22時28分発行